慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	平竹伝三著 ソヴィエト経済発展の分析
Sub Title	
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.6 (1956. 6) ,p.478(76)- 480(78)
JaLC DOI	10.14991/001.19560601-0076
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560601-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平竹傳三著

『ソヴィエト經濟發展の分析』

わが國におけるソヴィエト研究の歴史は、その地理的近接さから決して諸外國に劣るものではない。しかし外務省および滿鐵調査局の戰前の努力も、戰後はすべて第一歩から築き直すことになり、英・米の物量的・組織的研究に一籌を輸している。わが國の研究の進展を阻害する原因の第一は、ソ連における戰後急激に增加した出版物のすべてを入手し消化することの困難である。しかし幸いなことにソ連の統計資料は殆ど同じ出所であつて、判る限りの統計資料から、矛盾ないよう整理して綜合判定を下すことがソ連研究の主題となつている。從てこの第一の原因は、理論的考察水準の向上によつて相當程度補えるものと考えてよい。しかるにこの理論的水準の底迷が第二の原因となつているのである。

以上私はわが國ソ連研究立ちおくれの原因として、原資料消化の困難と理論的考察の貧困を擧げたけれども、これは從來の研究がすべてこの缺陷をもつというのでは勿論ない。今ここに紹介する平竹氏の著書は、ソ連研究に輝く指針を呈示するすぐれた勞作である。氏が本書に意圖された所は、「現狀分析の眞實の在り方」を「有機的關連としての發生要因の探究から」「後續の經濟的發展諸過程との綜合的關連のもとに」メスを振うことであるとされ、從來主として英米獨佛などの第二義的文献が主觀的觀念に左右されていることから逃れるため、直接豐富なソヴィエト原材料そのものによる自主的研究をすることである。

かかる意圖に從て本書は次の如き構成によつている。

(1) ロシア經濟發展過程の分析
　ロシア國家の起源――ロシア封建經濟――資本主義時代
(2) 社會主義經濟と五ヵ年計畫
　電化政策――工業生産力配置――農業の社會主義的集團化――農業生産の地域的專門化
(3) 最近のソヴィエト經濟
　通貨政策と低物價政策――貨幣機能――國民生活――産業立地政策
(4) 共産主義經濟構造への移行過程
　重工業政策――生産物流通制度

× × × ×

さて私はソ連の現狀分析にその歴史を顧みることの必要であることを認めるに吝かではない。しかしそれはあく迄も現狀の理解に役立つ限りにおいてである。私は氏が本書の第一編第一章で精密に檢討された學識に敬意をはらいつつも、その力説されるロシアの半東洋的性格が本書のどこに重要な地位をもつのか判らない。更に問う。封建時代から資本主義經濟への移行のための決定的契機は一八二五年のデカブリスト反亂という政治的なものではなく、封建經濟的生産關係と新興資本主義生産力との矛盾としてとらえるべきだとする氏の正しい史觀は、資本主義から社會主義への轉換の決定的契機を何故ソヴィエト政權確立の一九一八年に求めるのであろうか。

量より質への轉化は決して偶然的突發的なものではない。量の變化と同時に質の變化を忘れるべきでない。ソ連において社會主義への決定的轉換となつたものは、資本主義的要素に對する社會主義的要素の勝利である。この過渡期を無視してソ連の社會主義經濟を論ずることはできない。私は氏が第一編において社會主義革命迄の歴史的過程を考察されながら、第二編において直ちに五ヵ年計畫に敍述を移され、その過渡期に充分な考察をはらわれなかつた理由がうかがいたい。周知のように、ソ連の計畫經濟は幾多の動搖と激しい闘爭を經た後に成立したものであり、その動搖を最も集約的に表現しているものが、戰時共産主義とネップである。この時期こそが、ロシアの歴史とソヴィエトの發展とを結ぶ環であつた。この時期をいかに解釋するかが歴史的考察の死活を握ることではあるまいか。

次に、(2)五ヵ年計畫時代に移つてソヴィエト政權の意圖した所は、「ソヴィエト國民經濟を全面的に擴大强化するためには、なによりもまず工業生産力の徹底的な改造を行い、工業それ自體の急速な發展によつて、資本主義列强にたいする社會主義國家の經濟的從屬性を克服すること」、農業を社會主義的集團化すること、資本主義的諸要素を克服することにあつた。そのための電化、産業立地政策。この分析は氏の專門とする所であり、本書中最もすぐれた部分である。

更に、(3)最近ソヴィエト經濟の分析においても、讀者はそれぞれソヴィエト自身の資料の物語る所を學ぶことができるであろう。たとえば勞働者平均賃金月千ルーブル、最低六百ルーブル（一ルーブル約九〇圓）。また物價は生産力增大につれ次第にひき下げられ、重工業重點主義の搖ぎない主張は共産主義社會への前進を可能にし、商品交換から、生産物交換の引き渡し契約という段階に達している。また食糧穀物問題も八〇億プードに達して一應の解決をみた。等々、ソ連側の資料で說明されている。

以上のように本書は、ソ連側で自國の經濟をどのように見ているかを知るのに極めて便利な書物である。その意味で、たしかに本書は前述したわが國ソ連研究の第一の阻害因を克服する勞作であろう。しかし第二の阻害因たる理論的考察についてはどうであろうか。私は遺憾ながら氏が企圖された成果は達成されていないと思う。第一に資料相互の統一的理解にはらわれた考慮が充分ではない。現在ソ連の最大の問題は、各産業の飛躍的發展をもたらしながら、重工業と輕工業、工業と農業とのアンバランスをなくし、生活水準の向上を望もうということである。消費物資を僅かに增加するために、生産手段への投資をより大きくせねばならぬ惱み、生産を增大させるために必要とされる勞働力、生活水準を向上させるために必要であるにかかわらず農業生産の頭打ち。これらの問題は多にして一つ。すなわち擴大再生産の問題に結びつくものである。この重要な問題に本書は斷片的にしか觸れておられない。

第二に氏は餘りにも單純に、スターリンの經濟論文に理論的基盤を求めておられないか。第二〇回黨大會でスターリンは嚴しく批判された。しかし私はスターリンがなした社會主義社會についての大膽な問題提起を高く評價したい。だがスターリンはソ連の現實政策と理論とを極めて簡單に同一視している。例を擧げれば、社會主義社會における價値法則を計畫に單純に利用できるよう理論づけている。しかし價値法則は社會主義經濟計畫に簡單に利用できる性質の

ものではない筈である。國民所得にしても、貨幣の役割にしても、その利用に際しては、經濟計畫の目的を經濟學的にどんな條件であるか規定しておかなければならない。にもかかわらず平竹氏は餘りにもスターリンを信頼しすぎたようである。

更に言わせてもらうなら、本書において氏が博引傍證された諸論文のうち、その引用が該論文の中心點でなく、論文中の片言雙句にすぎないものも含まれていることは殘念である。

總じて以上の缺陷を考慮して本書を一讀するなら、ソヴィエト研究の一里塚として本書のもつ價値は決して低いものではない。（昭和三十年十月刊　A5　四〇〇頁　五五〇圓　東洋經濟新報社）

（加藤　寛）

中世末フランスの賃銀研究の諸前提

中世後期を過渡期としてでなく、轉換期として把えることを主張する業績がある。この立場は、黑死病による人口の減少に注目し、その影響で經濟構造に重大な變化が起つたという觀點から、十四・五世紀をヨーロッパ史における決定的轉期と看做すものであつた。一般に高賃銀がこの時期の特徴であり、生産規模の縮小と比較にならない程に極端な勞働力の減少によつて説明していた。例えばロジャーズ説。そして從來まで、價格と賃銀を上昇させる二つの要素として、黑死病とこれに續く流行病による勞働市場の混渦、通貨の品位切下げを強調し、中世後期は農業勞働者の黄金時代であり、農産物が低價であつたにも拘わらず、高賃銀を得ていたと考え、各國における特殊事情を顧慮することなく長くヨーロッパの全部に一樣に妥當するものとされた。

これに對しペロワ氏は、近着の『經濟史評論』一九五五年十二月號の「經濟史における新説欄」で反論を述べる。曰く、なるほど「フランスもイギリスも人口と生産の二重の低下を示した」。しかし「この二つの現象の相對的重要性は兩國において異なつて」おり、「イギリスでは、人口の減少が生産の低下よりも激し」く、從つて通説の如く、「賃銀は上昇した」と考えて差支えない。他方フランスでは、「戰爭と未だに不明な他の要素による經濟の崩壞が餘りにも完全で、人口よりも嚴しく生産を制限し」、「人口における非常な減少にも拘わらず、經濟規模の著しい縮小は賃銀を低くした」と見るべきであろう。「賃銀は商工業が衰退していたため低」く、「低賃銀は購買力の小なることを意味し、次いで製品の産出の少ないことを意味した」。「過剰生産による價格の一層の低下を避けるため、自治體の内規はすべての主要な工業における生産を制限すべく試みた。低い生産は雇傭の少ないことを意味し、利用し得る勞働者が絶對數において小となつたにも拘わらず、低い賃銀を意味した」と。從つて勞働者黄金時代ということは、「フランスの農業勞働者についていい得ないし、都市の賃銀勞働者については尚更である」。フランス中世末の勞働者について以上の如き斷定が理論的に可能であるとペロワ氏は信じた。

經濟史における中世後期の意義を考える場合、賃銀問題が最も重要であるが、これ程に把え難い問題はなく、ダヴェネル、ルヴァスール以來、本格的にこの問題に取組もうとした論者がなかつた。僅かにM・ブロックが擧げられるのみであつたが、その死によりこの領域には既に一人の專門家もなく、中世後期を扱つた種々な研究書のなかで少しばかり言及されるに過ぎなかつた。しかしこの問題は多くの他の問題に先んじて扱われる價値がある。不幸史料が餘りに散亂しているので、傾向的結論を出すことすら出來ない最も困難な問題の一つであつた。ペロワ氏の小論は、この問題に進もうとする研究者に基本的な注意を與えようという意圖の下に書かれたもので、殘存する出來るだけ多くの史料を渉獵する必要を强調することを忘れない。

中世末フランスの賃銀研究の上に留意すべき點として、ペロワ氏は次の三點を擧げる。

賃銀が契約される通貨の問題。通説に反して、「通貨の激變期は極く稀であつた」。ペロワ氏によれば、十四・五世紀を通じて通貨の目立つた不安定期は、百年戰爭初期の一三三六年から四三年までの八年間、次は一三四九年から六〇年までの時期、最後は戰局がフランス側に最も不利であつた一四一五年から三〇年までであり、以上の三期間に限つて通貨が著しく不安定で、從つて賃銀の高騰は殆んど破局的であつた。特に一三四九年に賃銀は激しく高騰したが、決して勞働力の缺乏による實質賃銀の上昇ではなく、通貨の品位切下げが斷行された結果で、從つて單なる名目賃銀の上昇であり、勞働者の生活向上を意味しない。十四・五世紀を通じ或る時期に賃銀の急騰が起つたとすれば、それは上述の品位切下げの三時期に限られ、從つて單なる名目賃銀の引上げであり、實質賃銀の上昇ではなかつた。しかもペロワ氏によれば、「通貨の非常な不安定期は、重要であつたけれども、賃銀の動きに恒久的に影響する程長引かなかつた」。しかし、上述の極端な變動期を除けば、通貨は追々に品位を切下げられていたのであり、一三四三年から一五〇〇年までの百五十年間に約五〇％の低下であつた。ただイギリスの場合と違い、「徐々でしかも少しも目立たなかつた」低下であつた點が特徴的であつたのである。通貨の問題について注意すべきは以上。

農村における賃銀。莊園記錄は中世末にいたると多く殘つていない。しかもイギリスにおける以上に廣範に莊園經濟はその時までに崩壞しており、大抵の直營地は貸出され、直營地で雇傭される勞働者については記錄がない。ブートリュッシュ教授の對象としたボルドー、ウォルフ氏の取上げたツールーズ、またフールキン氏が計畫しているパリ周邊についてこれは眞實であつた。これら三つの地方において勞働者といえば、單に葡萄栽培のために領主に雇傭される勞働者に過ぎなかつた。從つて農村における賃銀の問題は、葡萄栽培に雇傭される勞働者の賃銀の問題であつた。ペロワ氏によれば、この點が特に重要。

例えばボルドーでは、葡萄栽培勞働者の賃銀が、十四世紀後半から十五世紀初頭にかけて上昇の傾向にあり、一三五〇年の四乃至五ペンスに對し、一四三〇年には九乃至一〇ペンスとなつた。事實一四一〇年と一四三〇年の間には急速な上昇が起つた。これはオルレアン公の軍隊によつて起された破壞のために勞働市場が枯渇し、他